

第5期第11回生涯学習センター運営協議会議事要旨

〔日 時〕 2021年9月20日（月） 午後2時～4時

〔場 所〕 町田市生涯学習センター 学習室1・2

〔出席者〕 ※敬称略

委 員：古里貴士（副会長）、相澤真理、荒井仁、荒井容子、大野浩子、関村浩、西澤正彦、服部くに子、山口隆三、以上9名

〔欠席者〕 陶山慎治（会長）、堂前雅史

事務局：樋口センター長、持田担当課長、岡田管理係長、瀧澤事業係長、田中主事

〔傍聴人〕 1名

〔資 料〕 【1】 生涯学習審議会資料（抜粋）

【2】 東京都公民館連絡協議会委員部会資料

【3】 なんでもスマホ相談室チラシ

センター長陶山会長が欠席のため、進行は古里副会長が進行を行う。

1 報告事項

（1）センター長報告

- ・まん延防止等重点措置から、緊急事態宣言に変わり、20:00での閉館としている。
- ・ワクチン集団接種会場について、3回目のワクチン接種等の話題もあるが当初予定通り、年内を想定している。
- ・市民大学・ことぶき大学等事業は、感染予防を徹底して行っている。また、センターまつりは昨年同様、オンライン開催を予定している。
- ・なんでもスマホ相談室はマンツーマン形式で実施。2022年1月まで予約が入っている。現在一日に受講できる人数を拡張するように調整をしている。
- ・生涯学習審議会での審議について、民間活力導入の是非や導入分野・手法、大学、教育機関への期待等の意見が出ている。

【委員質問・意見➡事務局回答】

- ・なんでもスマホ相談室の拡充はどの程度か。➡1日5名から1日10名。
- ・全体的にはどのような方が受講しているか。➡高齢の方が多い。
- ・相談内容はどのような内容か。➡事前に相談内容を申告。相談内容をマンツーマンで指導。内容はインターネットの見方やSNSの使い方等様々。
- ・同じ方が何回も申込みことは可能か。➡リピート可能だが、予約が多く、2回目为先になってしまうのが課題。

- ・講師はどのような方がされているのか。➡業者委託。どのような機種でも対応できる点、製品・プランの売り込みはしない。知りたいことだけを知ることができる。
- ・生涯学習センターが、3回目の集団接種会場か。➡担当課から打診がきていない。
- ・生涯学習センターでの接種を分散し、病院での接種を主にして、貸出できないか。
- ➡中心市街地にある施設で利便性が高く、接種会場として使用。施設としてそのまま貸出すことの是非もあり、こちらの立場も積極的に主張していきたい。ただし、接種会場の開設は全市的な判断となるので、主張が通るかは分からない。

- ・生涯学習審議会の議論は民間活力の導入ありきで、委託や指定管理が前提なのか。
- ➡導入ありきで議論しているわけではない。

(2) 会長報告（会長欠席の為、事務局より）

- ・8月18日の生涯学習審議会にて、会長から生涯学習センター運営協議会で検討している内容を報告。
- ・生涯学習センター運営協議会と生涯学習審議会はそれぞれ独立した組織。
- ・例えば、要支援者への学習支援やデジタルの活用とデジタルデバインド対策。地域課題解決にむけた事業展開、行政教育機関・市民団体との連携強化・施設の認知度の向上については、生涯学習審議会でも議論しているが、生涯学習センター運営協議会でも、第4期から市民ニーズに応える事業について検討している項目。
- ・新たな課題が生涯学習審議会でもクローズアップあり、それに伴い、既存の市民ニーズが置いていかれないか。既存の市民ニーズにも配慮が必要ではないか。従来、重要視されてきた学び合いという視点を再認識することが重要。
- ・生涯学習センターでの事業は身近にあるべき。地域の社会教育施設を増やしていくことや、生涯学習資源の拡充はできないのかといった意見もあった。学校の統廃合等でコンパクトになり、削減されている状況で、生涯学習センター運営協議会が何を行うか問題提起されている。

(3) 東京都公民館連絡協議会の報告

○西澤委員から資料に基づき報告

- ・来年の2月5日に、東京都公民館研究大会が開催予定。
- ・基調講演「地域課題解決学習をつくる市民と職員をつなぐ対話とは～」について行われる。
- ・コロナ禍で開催方式が問題。
- ・東京都公民館連絡協議会の委員部会の第1回研修会が、9月11日に予定されていたが、緊急事態宣言延長に伴い中止。延期後の日程を検討中。

【委員質問・意見➡委員回答】

- ・現実的にどのように行うのか。➡基調講演があり、会場とオンラインでスムーズに議論。スムーズに議論するため、検討を行う必要がある。
- ・民間企業だとオンラインが発達している。オンラインでミーティングを行った際に、各グループに司会を配置し、個別にミーティングを行うことができる。システム・オンライン、人員等に費用を要すれば可能と思われる。➡加盟市の公民館でも、最近 Zoom が使えるようになった自治体もあり、人や機材、設備の問題に追いついていけない。次回の会場でどの程度のことができるか。時間が限られた中で、どのようにしていくのかを考える必要がある。

【副会長】オンラインに関しては、必要な機材・資源、それを扱える人が運営側にいるかが重要。司会二人で運用し、サブが意見等を拾うこと、機材関係を担えると良い。また、裏方も配置し、司会がそこまで手を回さないようにしておく必要がある。機材がどれぐらい準備できるのかを考えながら、準備を進める必要がある。➡会場とオンライン併用が難しい。円滑な討議のため運用方法を検討していくことが必要。

2 議題

(1) 審議会答申・改革プランを踏まえた生涯学習センター事業の推進について

【副会長】前回の意見では、学びの裾野を広げるため、周知方法をどう充実させるか。若者の認知向上のためにどう周知していくかという意見が多かった。具体的には大学と連携し、大学生向けに生涯学習センターやセンターの事業についてどう周知していくか。例えば、大学に出向き、青年学級等の事業の紹介を行うこと。生涯学習センター便りに類似したものを、より充実させるため、その生涯学習センター便りを若者に関わってもらい、生涯学習センターの事業を見える化していく等の意見が出ていた。

他にもオンラインのシステム構築をどう行うのか。オンラインをより充実させて行くべきという意見があった。また、デジタルデバイトの問題をどう克服していくかも課題としてある。その点も踏まえ、オンラインが持っている有効性を「学びの裾野を広げる」ための手法として、システムを構築することが必要。

地域で活動しているリーダーと連携する。「学びのネットワーク作りを促進する」にも関わるが、町田市は公民館が生涯学習センターは1館しかない。すべてを生涯学習センターで行うことは難しい。生涯学習センターが地域のすべてを把握することは難しい。地域で活動しているリーダーと連携し、学びの裾野を広げていくことが必要。

生涯学習センターが1館しかない中で、生涯学習センターの取り組みや機能をアウトリーチし、地域の中に生涯学習センターが出ていくことで学びの裾野を広げる。また、若者の参加を生涯学習センターのシステムとして位置付ける。企画委員や生涯学

習センター便り作りに絡めていくといった意見があった。「学びの裾野を広げる」ために生涯学習センターが何に取り組むのか議論したい。

- ・ SNS を利用した若者主体のネットワークが必要。大学の協力は得られないか。

- ・ 若者に学びの裾野を広げるのは、若者の利用が少ないため、関心を持ってもらうという主旨。若者が気付かない原因は何か。生涯学習審議会の若者向けワークショップ資料でも、町田の若者が何を学ぶ必要としているのか見えない。利用していないことが問題ではないと思う。町田の若者はどういう状況か。町田市の施策に協力している若者や、興味のある学生からではなく、社会教育の場で学ぶ様々な層の学びを、どのように保障するか。学びの裾野を広げるため、若者に対し、町田市で社会教育の施策の保障することを、生涯学習センターを利用していない層に主張する必要があるか。また、どのような施策が有効か考える必要がある。若者が関われば良いわけではない。

- ・ 地域に関心のある若者が、町田市の施策に関わり評価されているが、行政の思いに若者が合わせて発言していることもある。または、若者が関心のある分野。若者は、生涯学習センターをどう見るか。大学に協力してもらうだけの問題ではないと思う。

- ・ 大学も国の施策の中で地域と連携があり、前のめりだが、それ自体も問われるところがある。大学との連携を気にせず、町田市の社会教育施設として、生涯学習センターの利用が少ない年齢層が若者層であり、その層にとって生涯学習センターは必要か、必要ではないか。必要であれば、どのように判断して必要だと考えるのか。地域に関心のある若者に、アイデアをもらうことも、最初の取っ掛かりとしては良いが、少し違った把握が必要。若者が必要としている部分に繋げるため、どのような若者を対象とするか。対象の若者に、生涯学習センターが何を行うのか考えるべき。

- ・ 町田市役所に就職したい学生は町田市役所に関心がある。OJTのように、学生が行いたいことを実現できないか。

- ・ 若者のニーズの把握が必要。若者向けワークショップの資料では、PCや新生活、料理、新成人講座等の要望があった。若者の生の声を聞くべき。そのような視点で、どのような講座が展開できるのか。具体的な効果を考え出す必要がある。

【副会長】以前、話の出ていた学生団体のような、町田に興味がある若者のニーズをどのように講座化するか。どう取り組みを作るかを考えるべきという意見があった。

意欲やニーズを持つ若者がいる一方、困難な層の学生やニーズの把握ができていない若者もいる。既にニーズや意見を持った若者が入ることも大事だが、見えていない

ニーズやニーズを作り出す若者の生活があり、そこと生涯学習センターがどう結びつくのかを問題にされている。

・若者の化粧の仕方を知りたいというニーズは面白い。上から目をかけるような形で探すより、生涯学習センターの職員が関わって繋いでいくべき。どの地域が大変そうといったことや、生涯学習センターが事業を展開することで、何か道が開けるのではないかと思う人がいるとか。動きや流れができるように持っていくのも良い。具体的に顔が見え、問題があることに、生涯学習センターが取り組むべきことが見えてくれば、そこから若者を対象とした事業が模索されていく。漠然と若者が大変そうという視点では繋がらない。今の状況が見えないとしたら、見えるような職員体制やそのようなことを敏感に感じ、動きが起きてくるようなきっかけを作る必要がある。そのような動きに自然となっていくことから始まっていくとを感じる。

【副会長】若者と連携ではなく、若者の中にある学びのニーズの把握が必要。市民ニーズに沿った生涯学習事業の推進についてというテーマではあるが、若者の中にあるニーズの部分を考えることから出発すべきだという意見だと思う。ニーズの中には、化粧の仕方を知りたいという私たちに見えるニーズもあれば、私たちが知らない潜在的なニーズもある。生涯学習センターとして応えるべき学びのニーズに、どう応えていくかを出発点にして議論すべきであり、連携すること自体を目的として議論を出発させない方が良いという発言だと思う。

・若者のニーズに応えるための生涯学習センター事業を考える際に、運営協議会委員や生涯学習センター職員が、若者のニーズの中身をどう理解するのか。そこを把握できているのかどうか。もし、把握できているのであればそれを出し合い、議論もできる。まだ具体的なニーズが分からない段階であれば、そのニーズを私たちはどう把握するのか。課題として議論すべき。

・若者のニーズがどこにあるかということから出発する必要がある、学生に聞く必要がある。ある活動をしているリーダーのような人には、下に多くの人がいる。そのリーダーを集め、学生のニーズはどこにあるのか。学生は何に困っていて何が必要か。生涯学習センターに何を期待するのか話してもらおうと、それが伝わってくると思う。

・生涯学習センターの「ガクマチ EXPO」は、そのような方が参加している。その方が集まり、学生が何に困り、何を希望しているのか。生涯学習センターに何を望むのかを話し合い、ニーズが出てきたところでコラボ。講座・活動の提案等の役割を担ってもらい、連携をすれば何か見えると思う。最初のニーズを学生に聞く必要がある、大

学に聞き回るだけでなく、そのような活動をしているリーダーが一番把握している。生涯学習センターが全て担うのは、間違えだと思う。

・町田市と大学との連携に関する協定があり、町田市学長懇談会に参加する町田市と大学・短期大学等は様々なことを行っていると思うが、どのような活動をしているか分からない。協定書があり、多くの大学が入っているので、様々なことに取り掛かっていると思う。どうして活動が活発になっていないのか。これからどうするべきか。生涯学習センターだけでなく、このようなことも話し合っていく必要がある。

・ワークショップ資料に、若者向けの性教育相談室を設ける、メイク講座や新生活応援講座等の提案があるが、すべてを受け入れるのは難しい。パソコン教室等はやるべき。このような意見を謙虚に取り込み、町田の今後の進め方は考えていくべきだが、一つ一つ講座を行うのはどうなのかと疑問に感じている。

・生涯学習の意味は「一生を通じて学ぶ」こと。若者は18歳から30歳程度の方を指すと思うが、大学教育や企業教育、職業訓練等、学びの選択肢を持つのは若者。その中から自分で選び、人生が決まる。若者には、自分が学ぶべきこともあり、生涯学習センターが選択の最後の学習となるのは当たり前。その中で、町田市の若者は何が欠けているか。どのような手助けができるか。適切に調べないと、問題が分からない。

・生涯学習は、学ぶ機会がない人にも生涯、学びの機会を提供することと捉えられたが、今では学生が、その他に学ぶことも視野に入れ、生涯学習と考えられている。生涯学習は、高齢の方の集いのように思われるが、そうではない。

【委員質問・意見➡委員回答】

・本来の職業で学ぶことを町田市がやるのか。生涯学習がやるのか。➡それぞれで学んでいただくが、それ以外の様々な学びがある。

・選択肢を与えるためには、町田の若者の大多数がどのようなニーズを持っているかを事前に調べてないといけない。➡それを知るために、どのようにすれば私たちが効率的に若者のニーズを知ることができるか協議が必要。

【副会長】大学の授業を生涯学習センターで行うのではなく、若者の生涯学習センターへの参加や授業の一環で来館するという提案だと思う。授業で学生が生涯学習センターに来館し、関わってもらえないか。大学に行き、「こんな取り組みを行っているの

で良ければ参加してください」と宣伝する機会を、大学に設けてもらえないかという提案と感じた。大学の授業を生涯学習センターに持ってくるという話ではない。

大学生が生涯学習センターの取り組みに関わり、関心を高め、若者のニーズを把握する。担当委員の地域のリーダーの話も、地域のリーダーの背後には多くの若者がおり、我々が出会わない若者のニーズも、把握していることだと思う。地域で活動するリーダーと接点を持ち、若者のニーズを把握していく手法の提案だと思う。

ネットワークを作るだけでなく、お金も人員も限られている生涯学習センターが、本来担うべき役割は何か。結論は出ないが、民間活力導入のとも関わる。生涯学習センターの本来担うべき役割を明確にしないと、民間活力導入が有効か分からない。民間活力導入が、生涯学習センターの事業に対して、有効かどうか議論も必要。運営協議会に留まらず、生涯学習審議会でも議論すべき。生涯学習センターとして、事業をより良いもの、市民ニーズに沿ったものとするため、限られたお金・人員、一館しかない現状で、担うべき役割、何か見えてくるものがあれば整理し、まとめたい。

・四大受験して、大学生になる方は50%いるか否かという状況。社会教育に関心を持つ若者よりも、そうでない方が社会教育を必要としていると思う。現状、実際には結びつかない。余裕がなく、一人の子に時間をかけて寄り添わなければ、学びまでたどり着かない（たどり着かない障がい持つ方等も置いていかないでほしい）。

大和市のシリウスの生涯学習センターに多くの若者がいた。館内に様々な掲示があり、若者の目に入る。見て知ることも大事だと思うので、積極的ではない子も活用できるような、場を用意し、その中からニーズも拾って欲しい。また、気づける人を、若者・大人の中にも増やすことを大事にしたい。

【副会長】「学びのネットワーク作り」に入る。先ほど発言のあった、ネットワーク作りそのものを目的とせず、生涯学習センターが対象とする町田市民の中にある学びのニーズから議論する。その学びのニーズに応えるため、様々な機関と連携し、ネットワークを作る必要があるという発想で、どうするか議論したい。今回を踏まえ、追加意見等の課題が出るので、次回考えたことを紹介してもらおう。

・答申では2つ具体的な提案があり、1つは関係機関等がどのようなことを行っているか、情報収集する必要がある。それを元に、学習面で見取り図を作る必要があるという提案が出ている。もう1つが、学習で学んだ成果をどう地域に還元するか。

・運営協議会で作成した中間まとめにも、行政、教育機関、NPO、市民団体との関係強化とあり、社会福祉協議会、ボランティアセンター、ボランティアコーディネーター、町田市地域活動サポートオフィスと連携することが必要とある。市民ニーズに

応えるための情報収集・発信も、庁内専門部署と関係を整理しながら情報収集し、発信していくとある。また、地域課題解決に向けた事業展開も、地区協議会とより連携を図るべきとある。生涯学習審議会の意見と重なる意見が中間まとめでも出ている。

【委員質問・意見➡副会長回答】

・学びのネットワークとは具体的にどういったイメージのものか➡生涯学習センター以外、市役所の環境・福祉等の部署で学習活動に取り組んでいる。どの部署でどんな事業を行っているかを情報共有し、連携することを思い描いている。学びの機会の提供は行政だけでなく、NPO団体等でも提供されている。民間の中には高い専門性を持った団体もあるので、取り組み情報を把握し、専門性を活かした取り組みを情報収集しながら、連携を図るといったイメージ。

・実際に組織化されて、インターネット上で見られるということか➡オンライン上で何か発信するやり方もあるが、組織間の繋がりを作るという話ではないと思う。他の団体・部署が何に取り組んでいるのかを、常に情報共有し、連携していくよう、町田市全体を通してどう作っているのか。

生涯学習センターが1館しかなく、全てを賄うのが難しい。民間が得意な点は任せて良いと思う。その中で生涯学習センターでなければできないことを考え、本来の役割を果たし、他の部署等が得意な部分は任せる。ネットワークのあり方一つのイメージだが、生涯学習センターで行っていない取り組みを、行っている部署を紹介することで町田市全体を通じて、学ぶネットワーク、学びの機会を作るネットワークをどう作るのかという議論だと考えている。

・ネットワークの運営はどう行われるのか。➡ネットワークを作る時のネットワークが組織の形か否かは別だと思う。他の部署も直接行う仕事と、そうではない学び・情報の伝達等、生涯学習センターができることがあると思う。重複しないよう情報共有し、関連する初期段階の学びはこちらといった連携ができれば良い。

・子育て等でも、担当課とNPOが手の足りない部分を補い合っている。大学でも、町田市と大学の連携に関する協定を活用している。大学等が地域住民を顧客としたサービスを提供する。情報交換し、資源・人材等を行き来させる。一つの大学だけでなく、多くの大学が協定のもとで動いている。連携を緻密に網目のように作れば良い。生涯学習センターが担う部分は大きく、具体的な何かを行うのではなく、その中枢を担えば良い。ネットワークを作ることだけでも生涯学習センターの役割は十分。

・大学に、学生の困りごとに直につながる事業があるわけではない。大学の労働学で学ぶだけでなく、職場で労働に関する要求の仕方等を学ぶ必要がある。

・学生は子どもの育て方に不安を感じており、虐待せずに子育てできるか不安がある。高校でも乳幼児と触れ合う授業があり、フォローしたいと考えている。要望を、職員が住民団体等聞くこと等をネットワークと考える。

・NPO等では、切実な問題を抱えている住民と出会っているが、行政では対応できず、直接対応する枠がないというケースがある。本人や支える人が一緒に学び考える。市の施策を変えるために考える場合は、生涯学習センターで支える必要がある。

・相談・対処の仕方を学べるか、その人の力にしていくかの観点は、教育関係の職員でないとできないと思う。

・施策に転換する際、NPOや他部署にアイデアを出し、他部署が教育とは違うアイデアを加えることがネットワークとして重要。生涯学習センターの職員が、日頃から市民団体等と繋がり、頼まれてからではなく学びの場を用意できないか。

・行政の施策と対立するような学習でも生涯学習センターならできるが、自分が思う施策と矛盾する学習は難しい。そのような学習からアイデアをもらおうと、他部署へ違ったアイデアがあると提案できる。そのようなネットワークのためには、生涯学習センター職員の力量とセンスが要求される。

【副会長】環境の職員は環境問題の専門性があり、福祉の職員は福祉の専門性がある。それを学びに置き換える際に、生涯学習センターの職員（教育関係職員、社会教育職員）が当該部署の専門性を学びの形に作り変える。ここに生涯学習センターの専門性があり、そのように活かせるネットワークを考える必要があると受け止めた。

・子育てには、若いお母さんお父さんが重要。不登校気味な子等に対し、子どもセンターまあちが様々なサポートをしている。子供センターまあちの行事をそうした子が担い、その体験が糧になっている。子どもセンターまあちには、乳幼児を連れた親が多く来館し、子育ての相談も受けている。そこで問題を拾えらると、どのようなサポートが必要か分かり、生涯学習センターと繋がれば、どんな講座が有効か見えてくる。

・小学校との連携では、大学が地域貢献に力を入れており、コロナ拡大前は、小学校から要望があった授業等を学生主導で行っていた（ボランティア活動、学習支援等）。某大学では、国際交流の学習に、約20人の留学生が参加したこともある。

・障がいを持つ子の親の会で、若いお母さんが相談するところがないと話があり、現在、おしゃべり会に似たことを行っている。悩みを話し、お母さんの肩の荷を下ろすことを目的に取り組んでいるが、コロナのため対面で行えない。オンラインだとお母さんの表情等が分からないので、対面で行いたい。その中で繋がるため、ボランティアコーディネーターの方や社会福祉協議会等が重要。地域に戻らないと、悩み等を知ってもらえない。有事の際に情報共有し、地域資源を有効に使った連携を望みたい。

・拠点・人が重要と感じる。子どもセンターまあちの館長は開館以来、同じ現場または異動先も子どもセンターにいる。そのようなことが大事で、ネットワークを更に深めたり広げたりできる。生涯学習センターもそのようにできたら良い。

・連続講座が活発だった際には、家庭教育支援事業に参加したお母さんが、地域の核になっていた。単発・有名なことも大事だが、生涯学習センターで連続講座を行い、そこで学んだお母さんが地域に波及し、ネットワークを広げることにもなる。

【副会長】連続講座から地域への還元は、生涯学習センターがどうネットワークを作るかもあるが、地域の中でネットワークを作ることを生涯学習センターがサポートする部分。学びのサポートを通じて、地域の中にネットワークができること。ある意味「学びの裾野を広げる」に関わってくる。地域の中のニーズを生涯学習センターにより反映させるよう、生涯学習センターと他機関・他部署とのネットワーク作りもしつつ、地域のネットワーク作りを事業として、生涯学習センターが意識的に取り組む。

・継続して繋がらなければならないわけではなく、問題が生じた際の連携により、成果を残し、今後問題が生じた際も活かされるか。上手く他の問題が出た時に繋がれるか、といった普遍的なつながり方の感覚が充実しているかどうかだと思う。良い連携だが、引き継がれていない。あるいは引き継がれている等を知りたい。

【副会長】次回、生涯学習センターとしてどう連携して取り組んできたか。連携することを目的よりも、「市民のニーズにどう応えていくのか」という点で議論をしたい。

3 その他

（事務局より次回日程の説明）